

みやぎ・木になる職人紀行

木と生きる vol.Ⅱ

絆“木づな”



みやぎ・木になる職人紀行ルート



何気なく通り過ぎていた風景が、こんなにもバリエーションに富んで変化のある美しい風景だったことに感動、そして個性溢れる職人の皆さんと出会って涙と笑いを交えた対話に感動、彼らの仕事に向かう真摯な姿勢と熱き心に感動、地域に根ざした様々な生業、その懐の深さを知って感動…。今回もまたその感動を求めて、豊かな自然と人々が紡いだ、木との関わりが深い生業とそれに従事する職人に巡り会う旅に出ることといたします。

東京オリンピック 2020+1 に木を思う

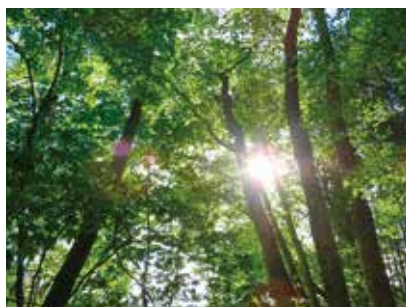
コロナ禍に翻弄されながら、1年延期の上で無観客という前代未聞のスタイルで開催された東京オリンピック。画面を通して、躍動する選手達からたくさんの感動をいただいたほか、大会を支えた多くのスタッフやボランティア、関係者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

そんな大会の開会式では、とあるパフォーマンスが組み込まれていて、その意外性とインパクトを覚えたのは、林業に関わりのある私だからこそ、そう思ったのでしょうか。それは、日本の和の伝統技術、世界無形文化遺産にも登録された木工技術をモチーフにした演出で、絆纏をまとった女優が扮する棟梁の威勢の良いかけ声によって、大勢の大工職人が作業しながら、木製の大きな五つの輪が中央に運ばれ、寄せ木細工のように五輪マークが完成していくものでした。

開会式の舞台である新国立競技場も、かの有名な建築家・隈研吾氏の設計により、緑豊かな周辺の環境と調和した空間として、日本の風土と伝統を重んじるために、たくさんの木材が使用され、それを象徴する競技場を囲むように張り出した軒庇には、全国47都道府県から調達された地域材が使用されています。本来ならば、世界中から多くの人々が集い、その木材の使われ方、日本の伝統、木の文化を彼らにもっと知らしめることができたことですが、こうして世界の最高の舞台で、こんなにも「木」がクローズアップされて大いに可視化されたことに、この上ない嬉しさと感慨深いものがありました。

さて、今回のオリンピックでは「多様性」が理念の大きな柱の一つとして掲げられました。人種や宗教、文化、性差、障がいの有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れて互いに認め合う世界をめざしていこうというものです。昨年度に引き続き、本年度も「木育」を広義の生涯教育として捉え、豊かな自然（森林）を営み、その恵み（木）を巧みに生かす技や知恵を受け継いできた生業・人に焦点を当て、「人と木（森林）」とのつながりや生き方、木（森林）への思いなどを、彼らとの出会い旅・紀行文風にまとめました。その生業にも「多様性」があり、奥深いものがあります。その生業に使われる木にも「多様性」があり、深い味わいがあります。そんな視点に立ちながら、世代を超えて幅広く、木（森林）の良さ、大切さ、人々（の生活）と木の関わりに気づいていただければ幸いです。

令和3年12月



宮城県林業振興協会

会長 佐藤 久一郎



目 次

巻 頭 言 ～ 東京オリンピック 2020+1 に木を思う ～

1. 木は人生なり 1

(製材職人 佐藤大制さん)

山間の風景點描 竹林と納屋

2. 本物の木を知らしめる 7

(家具職人 増野繁治さん)

山間の風景點描 春爛漫

3. 木は生きている 13

(木工職人 西條孝一さん)

山間の風景點描 主役は如何に

4. 木に魂を吹き込む 19

(一刀彫り職人 石橋康宏さん)

山間の風景點描 夏を彩る山百合

5. 地元の木に拘る 25

(木造建築家 佐々木文彦さん)

山間の風景點描 聳え立つ楠

掲載内容に関する留意事項

巻 末 言 ～ 取材を終えて～つながりの大切さ～

1. 木は人生なり

製材職人 佐藤 大制さん

県下でも希な大径木（銘木）を製材する佐藤大制さんから「今から、ケヤキの大木の半割り（大木のため予め二つに切り割る作業）を行うから。」の連絡が急遽入った。事前に挨拶を兼ねて取材の協力をお願いした際に、滅多にお目にかかれないという希に見る大径木の半割り作業を行う日が決まり次第、大制さんから連絡頂くことを約束していたところであった。そして、胸が高鳴るのを抑えながら作業現場へ向かった。

技を極める

県道迫米山線沿いの田んぼ脇に徐に放置されていたケヤキの大木の上で、自らチェーンソーを操る大制さんが立っていた。オイル補給で休憩の際に話を伺った。栗原市のとある屋敷林にあったケヤキの大木で、地元の森林組合が伐採したものだそう。二本のケヤキ丸太があり、そのうち2年半ほど放置して天然乾燥させたものを半割りしていた。年輪をざっと数えると、150年は優に超えている。幹周りは3mもあるだろう途轍もない大木である。木目に空（通常の柾目とも板目とも異なって希に現れる複雑な模様のものをいう。その希少価値・審美的価値から珍重される。）があるのか、外観からどうやって見分けるのか伺った。「こういう凹凸や局部的なねじれ、湾曲のある箇所、または瘤の部分などがあると空が出るよ。」とのこと。約2時



ケヤキの大木に圧倒される



見事に半割り完了



表面の凹凸が空の有無を占う

間かけて半割り作業が終了した。見事に真っ二つに割れた。凄い技である。が、その切り口面を触りながら、そして首を横に振りながら「まだまだ未熟だね。こうして切り口に段差が出来るのはダメな証拠だ。すばっと滑らかに切らないと…。」悔しさを滲ませ、本当に謙遜されていた。さらなる高みを目指す熟練の職人魂を見せていただいた。この材を工場に持ち帰り、帯鋸盤で板材を切り出すという。その作業も直ぐには出来ないことから、日程が決まり次第、連絡いただけることとなった。実直で誠実な製材職人の姿である。

「先に半割りしたケヤキの大径材を今から板材にするから。」今回も急遽連絡が入った。はたまた急いで製材工場へ赴いた。県道沿いに歴史を感じさせる工場があった。丸太や端材、板材が山のように置かれ、鋸盤の轟音と仄かな木の香りに包まれている。工場では、既に板材に加工している作業中であつた。奥

様が乗って台車（送材車）を操作し、年季の入った年代物の帯鋸盤で本当にゆっくりと大きなケヤキ材がスライスされていく。大制さんは、均一にスライスされているかどうか帯鋸盤の具合を見ながら、奥様の台車操作を指示されていた。15分ほどでスライス作業が終了。板材が今度は大制さんが操作するフォークリフトで工場外の場所へ運び出され、横に寝かせてさらに乾燥させる。一連の作業が終わったのを見計らって、休憩場所へ移動してお話を伺った。奥様も同席してくれた。夫唱婦随の作業風景にほっこり。そして内助の功としての奥様が、大制さんをなお一層輝かせてくれる大きな存在であつた。



歴史を刻む工場外観



工場に掲げられていた
地産地消の看板

技を果たして木目は如何に?!わくわく感…

大制さんは、先代の父親が始めた製材所を引き継いで2代目となる。中学生の頃から、父親の仕事を手伝ってきたそうだ。山から自ら木を伐り出してきたり、森林組合が伐り出した木材が集積されている土場から運んできた。当時は、まだユニック（クレーンを装備したトラッ



端材から生まれ変わった置物と大制さん



奥様が送材車を操る



大制さんが帯鋸盤を操る

クで、取り付けられたクレーンを使って重量物を荷台に運んで運搬できるトラック) といった機材は本当に希で、手作りの集材機械で木材を運搬したという。大制さんにとって、木材は幼い頃から当たり前のよう
に存在する身近なものであった。製材業を引き継ぐことにはなんら抵抗はなく、自然の成り行きで家業を引き継いだ。大きな木を見ていると、どんな木目をして
いるのか、どんな美しい空が出てくるのか、不思議にわくわくしてくるという。勿論、想定外の木目でがっかりすることもあり、正に賭けのようなこともあるが、その高揚感が大制さんにとって製材業の魅力であり、やり甲斐であるという。

大制さんは「木材は人生のようなものだ。」という。人それぞれに違った人生があるように、木によっては全く使われずに棄てられてしまうものもあれば、チップ

材として粉々に碎かれて紙の原料にしかないものもあれば、人の手に掛かって住宅資材になったり、立派な神棚になったり、精巧な家具になったりして人々の生活に大いに役立つものである。そして、木を生かすも棄てるも人次第であるという。そうした木の運命に感慨深いものがあるという。製材の過程で沢山の端材が出てくるが、そんな端材を道路沿いに無造作に積んでおくと、通りすがりの人の目に止まり、「この材木を譲っていただけませんか。」と聞かれるそうである。そうした商談?が結構あるという。中には、端材を接着してある程度の大きさにして、彫像の材料として使うという。大制さんがアルバムを取り出してきてくれて、その彫像写真を見せてくれた。現在は、石巻市のとある神社に寄贈されているという太鼓の置き台として彫られた精緻な鬼の彫像であった。ケヤキの端材を重ね合わせて彫り上げたもので、さもない端材が人の手によってこうして新たな命を吹き返す。別な彫り物も見せていただいた。ケヤキの端材で作られた会社名が彫られた置物で、その製作者から御礼に



ケヤキを中心に様々な板材が立てかけられていた

いただいたものだという。確かに、工場脇には沢山の端材や美しい木目のケヤキ材の端切れが積み置かれており、自動車で走行していても一目瞭然と目に付く。

木が人を繋げ、広げる

木には、温もりがあって肌触りが良くて気分が和らぐなど様々な良さを持ち得ているが、木そのものの良さというよりも、木が取り持つ人との繋がりを大制さんは強調する。木材取引で様々な人と繋がっていく。良い木を求めて専ら東北6県を主体に歩き回る。そこで、人から人へ繋がっていく、広がっていくことに木の良さを感じているという。木を通していろんな出来事が自分を成長させてくれるし、素晴らしい人と出会わせてくれる。日光の今市へヒノキの大径木を買い求めに行った時のことである。買い取る自信があったにもかかわらず、落札したのは別の者で、そんな高値で落札しても商売できる人がいることを思い知らされたそう。30代の頃、東京で開催された全国銘木展示会で思わぬ人と出会ったことも、自分にとって大きな宝であったという。林与一氏という銘木業界では知る人ぞ知る有名人であり、木挽き職人としてその名を響かせている人物とのこと。手鋸一つで原木（原板）を物の見事に切る名人で、切らなくとも材質や木目模様などを見分けられる目利きの達人でもあるそう。大制さんは、この名人のことを以前から本を読んで知っていたそうで、その展示会で出会うことが出来た上に、氏が切り方を実演されていて、その凄技を目の前で見ることが出来たことを、今でも鮮明に覚えているそうである。その林名人の話をしている大制さんは目を輝かせ、気持ちが高ぶっているようである。本当に凄い人と出会って感動した思いが伝わってきた。

木が人を引きつけ、寄せつける

今まで、製材業を営んできて辛かったことはないそうである。やはり、何よりも木を通して沢山の仲間が出来たこと、通りすがりの人も木に興味を持って買ってくれる人が沢山いること、木が自分を呼んでくれているとも表現された。最近では、人家の居久根が大きくなって所有者の手を煩わしている事案が多くなり、伐採の依頼が増えているそうである。二束三文の木もあるが、



作業を終えて帯鋸を持つ大制さん

どんな木でも引き受けてあげているそうである。木のおかげでもあるが、大制さん自身の誠実な人柄が沢山の人を寄せつけているのである。

そんな大制さんから、切実な問題を投げかけられた。「子どもたちも含めて若い世代の人は木の良さをわかってくれない。木は皆、木としか見ない。まずは木に触れてもらいたい。触れ合える機会が必要である。触ってこそ木の良さが伝わるんだ。」登米市の産業まつりの会場の一角で、木工コーナーを設けて子どもたちに工作してもらっているが、それが好評であるという。子どもたちは無我夢中で工作に打ち込むようだ。「木の肌触りが彼らにはいいんだよね。」大制さんの顔が一瞬ほころんだ。「今の林業は大変だ。後継者を如何に育てていくか。山の維持費も大変だよ。木材価格が上がらないとね…。」大制さんの顔が峻とした。

最後に、製材機械の話を伺った。帯鋸盤は先代から使っているもので既に半世紀は使っているという代物である。帯鋸の高さは油圧で調整される場合が多いが、この機械は手動で調整できるので、どんな太さの木にも合わせられる良さがあるそうだ。ちょっとした故障は自分で修理できるのもいいそうだ。一方、台車（軽便自動送材車）はデジタル制御の近代的な機械で、これが至極便利なようであるが、素人では修理が出来ず多額の費用が嵩むそうである。やはりロートル機械の方が使い勝手がいいそうである。工場で送材車を操作されていた奥様も、大制さんの話に微笑みながら頷かれた。

大制さんがさらに微笑んだ。今回スライスしたケヤキ材に、予想どおりの美しい杣が出てきたことが大変嬉しかったのである。板材をあらためて見せていただいた。わざわざフォークリフトを持ち出して、場外に置いていた板材を吊り上げて、板の裏面に出ている杣の場所を指し示してくれた。総じてケヤキ材は白っぽい材色であるが、この材は黄色みがかっていた。これは年数が相当経っているもので、大径木ほど黄色みが強くなるそうである。このケヤキの板材は、家具職人の手に委ねられるという。木を介してまた人が繋がっていく。



使い込まれた帯鋸盤と大制さん



美しいケヤキの杣



やま あい ふう けい てん びょう

山間の風景点描



竹林と納屋



この納屋には、地方によくある郷土資料館で見かける農機具が沢山ありそうだ。立てかけられている荷車の車輪が印象的である。道具は皆現役で働いているのだろうか。雪の重みで垂れ下がった竹林が納屋を包み込んでいた。

2. 本物の木を知らしめる

家具職人 増野 繁治さん



2002 年度に森の名手・名人にも認定された伝統工芸士で家具職人の増野繁治さんから、「栗駒産のクリノキで椅子を製作中なので、是非取材にお越し下さい。」との連絡が入った。事前に取材を請うために挨拶に伺った時は、マスク越しにも実に厳格で何事にも真っ直ぐなお方のように見受けられ、これは手厳しく問われるかも？話しかけるのに勇気が要るような印象であったが、当方の取材趣旨を快く引き受けてくださった。そして、初対面とは思えぬ本当に饒舌な語り口でお話し頂いた。そんな矢先での連絡に、繁治さんの誠実な一姿を嬉しく思った。

新興住宅地を過ぎていくと、辺りは里の風景が広がる。市道から少し山間へ入っていくと、周囲の森林に溶け込むように建つ木造の工房が見えてくる。木材を挽く機械の音が近づいた。繁治さんの工房「木香舎」である。前回の挨拶後の再会ということで、長身にジーパンとカッターシャツの似合うスリムな若々しい姿の繁治さんが快く出迎えてくれた。



閑静な佇まいの工房

人間国宝の作品との出会い

今回の連絡に御礼を述べ、しばし雑談めいた話をしながらも、繁治さんの饒舌で話題豊富な話に引き込まれていった。木工への道を決めたのは、中学生の頃だという。そのきっかけは木工の巨人とも称される人間国宝・黒田辰秋氏（1904～1982、1970 年に重要無形文化財「木工芸」保持者（人間国宝）認定）の作品との出会いだそうである。とあるデパー



柔和な顔にも芯の強さが漲る
繁治さん

トで展示即売されていた氏の作品は、ケヤキ材で製作された 1,800mm 超えの大きな飾り棚であった。価格は庶民が1軒家を買えるほどの破格の値が付けられていた。当時は指物と呼ばれる小さな家具が主流で、こんなに大きな作品ができることに感銘し、自分はこうした作品を作るんだと決心したそうである。世界で最も大きな木造建築物で世界最古の東大寺にまで話が及び、木の素晴らしさ、木の美しさを物の見事に使いこなした国宝の技との出会い、当時の感動を声高に伝えてくれた。そして日本が誇る宮城県の伝統工芸品・仙台簞笥との出会いも、繁治さんの創作意欲をさらに高めたそうである。空の艶やかなケヤキの無垢材と、重厚な彫金金具を仕込み入れた存在感に溢れる至高な工芸品である。

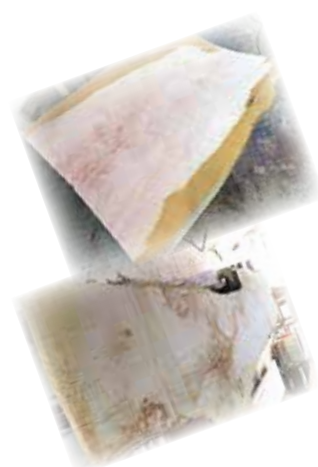


繁治さんを奮い立たせた仙台簞笥



木工は工芸品であることの自負

50 年前は木工という職業は下に見られていたので、なぜ（そのような）木工職人をめざすのかと当時はよく言われたそうだ。「私の木工は工芸品であり、50 年、100 年経って評価されるものと認められました。」お陰で、著名人からの注文が引っこりなしにあり、県内でも一目置かれるようになって、子どもたちからも理解されるようになったことが、大変嬉しいという。その話をされたとき、繁治



様々な樹種の大木から製材された板材が、所狭しに置かれている

さんの目が潤んでいたのが印象的であった。「真面目に木工職人をして飯が食っていけないので、どんどん店が消えていく中、他の人がやらないものを作る。」

そんな労苦も津々と伝わってきた。また、結婚して、子どもが出来て自分が家族のために頑張らなくてはという思いが、士気の高揚と木工への愛着をさらに強めていったそうだ。東日本大震災もその後押しとなった。こうして命を救われ生き延び長らえて、木工に携われることにも感謝の気持ちでいっぱいだという。「今、座っている椅子は



研磨作業に勤しむ繁治さん

かの有名女優が座った椅子だよ。」震災後、その女優が被災者支援のために朗読会を行った際に、主催者から女優に座っていただくための椅子の依頼があり、自作の3種類を用意して自身に選んでいただき、それがこの椅子だそうである。確かに座り心地が実に良い。この時ばかりは、その椅子に自分が座っているのが夢のようであった。女優は敢えて原爆で失った家族の物語を語られたそうである。震災も大変な災難であるが、被災者にそれ以上に大変な家族がいることを気づかせて、生きていることの喜びと勇気を与えたことを繁治さん自身も感動し、さらなる創作意欲を駆り立てられたそうである。繁治さんはこの間ずっと涙ぐんでいた。様々な思いが過っていたのであろう。



かの有名女優が朗読で座られた椅子

木の文化こそ究極の文化

繁治さんは、いつも誇りに思っていることがあるそうだ。日本には木の文化という世界に誇れる素晴らしい文化を持っていることである。ヨーロッパにもかつては木造建築物が沢山あったが、戦争で焼き尽くされ、木に代わって石の文化が隆盛した。世界中の人々が求めている究極のものは木であること、あのアポロ宇宙船飛行士アームストロング氏が地球に帰還して自宅で真っ先にしたことは、木の椅子に座って木の良さに浸り寛いだことだそうである。日本には幸いにして法隆寺や東大寺など素晴らしい木造建築物が数多く残っている。それらに類する木工も伝統的な文化の品々であり、繁治さんは木の文化「工芸品」を守り続けていかなければならない責務を背負っているという。木は循環できる。たとえ燃えてもまた造れば（作れば）いい。木を植えて伐って使ってまた植える、循環利用できる素晴らしい素材であると、増野氏は強調する。そして、なによりも寿命があること。木は千年持つ。法隆寺や東大寺も然り。ずっと残されていくものである。美しいが故に残されていくという。



松島町産ケヤキ材テーブル
一際空が美しい天板



松島町産ケヤキ材テーブル（脚部）

様々な出会いとエピソード

増野氏は 20 代の時に会った当時東北工業大学教授で工業デザイナーの秋岡芳夫氏に感銘を受け、さらなる木工への道を揺るぎないものにしたという。秋岡氏がこう言ったそうである。「宇宙船には様々な部品があり、それは日本の小さな町工場で作られたものが多い。そこには刃物、刃で研磨する技が卓越している



繁治さん自慢の名工が打った道具

ことにある。何ミクロンの薄さまで一寸の狂いもなく均一に磨く技である。それが木工品の原点にある。」という。繁治さん自身も木工に不可欠な刃を大切にしている。刃を丹念に磨く習慣は欠かせない。

これまでの経験で一番良かったことは、40 代の頃のかの有名な歌舞伎役者との出会いだそうである。当時は畳の部屋で座って化粧するのが常であったが、椅子に座って使う鏡台の注文を頂いたそうである。注文よりも歌舞伎界の大変さ、伝統を重んじる歌舞伎の凄さを知ることが出来、木工に賭ける勇気をもたらったそうである。繁治さんは歌舞伎役者を真似て名台詞を即興で披露してくれた。一方、一番辛かったことは、30 代に自らの工房が火事になって全焼してしまったこと。梁の上に溜まった埃に、たまたま薪ストーブの火の粉が移ってしまい燃えてしまった。金輪際、ストーブの後始末は入念に行うようになったそうである。

仕事の中でのエピソードは枚挙にいとまが無いほどに多い。著名人の別荘に飾る調度品や慶弔の記念品の注文が頻繁に舞い込むという。注文から構想まで3年ほど要し、そこから製作に入って1ヶ月ほどで完成させるという。オリジナル作品の原点は、昭和 57～58 年頃に現在の宮城県コンベンション協会（公益社団法人仙台観光国際協会か）が主催するデザインコンクールに出展した椅子で、座板がクリノキ、骨組みは全てナラで作られている。このコンクールでこの椅子が前述の工業デザイナー秋岡氏の目に止まった。「当時の出展作品ではこの椅子が大きい作品だったので、目に止まったのかもしれない。」と、謙遜されながら思い出を語ってくれた。



繁治さん作品の原点となった椅子

木に溢れた生活の幸せ、様々な木、本物の木

次代の人々に伝えたいことは、身近に溢れている木工品が、実は世界に広がる素晴らしい文化であること、当たり前の木工品は世界にとっては羨望の品であり誇りと凄い文化であること理解してもらいたい。世界に目を向けると、紛争や貧困で苦しんでいる人々の生活には、安くて扱いやすいプラスチック製品で溢れている。木製品に溢れている生活がどんなに幸せで素晴らしいことなのか知ってもらいたい。日本では、戦中戦後に植えられた人工林のスギ材利用促進



チップに粉碎されてしまう栗駒産のクリノキが椅子に生まれ変わって命を宿す



を響き渡らせることに躍起になっているが、様々な木があること、本物の木を知ってもらいたい。周囲の方々から是非伝統を守ってもらいたいと言われるが、容易いことではないが、頑

張り続けたい。その機動力は、これまでの何十年も培った経験、そして家族の力である。家族のお陰で今の自分があること。感動の言葉であった。

取材の後、作品を見学させて頂いた。松島町産のケヤキで作ったという完成して間もない重厚なテーブル、電話で連絡頂いた栗駒産のクリノキで製作中の椅子は、蔵王町の高齢者施設へ 50 基納品するという。チップ材になりかけていたクリノキを救って椅子として生きながらえた木材である。また、かの有名な辰野健吾氏設計の伝統建築物東京駅丸の内口のホテルの窓枠受注で、事前に試作した作品が工房の正面に飾られていた。かつて納品した調度品が、遺産として行き場を失ってしまい買い取ったものもある。著名な美術館や病院に収めた作品の一部も見せて頂いた。兎にも角にも凄い職人が身近にいた。因みに工房の名称「木香舎」とは、仙台弁で「何やってるのっしゃ?」と問われ「木工っしゃ」と答えたことから、それを当て字にして付けたそうである。思わず大笑い。最後の最後にその風貌から想像できない洒落言葉とそのユニークなキャラクターをあらためて感じながら、繁治さんの見送りを受けて工房を後にした。



伝統を重んじた建築に使われる木製窓枠



やま あい ふう けい てん びょう

山間の風景点描



春爛漫



ここはヤマザクラの北限の地。サクラにも様々な種類があり、遠目から見ても淡いピンクから純白なものまで様々だ。まさにサクラの競演舞台である。モミの濃緑がサクラ達を引き立ててくれていた。春爛漫の里山である。

3. 木は生きている

木工職人 西條 孝一さん

国道 45 号線横山集落から東の翁倉山方面、大萱沢へ入ると、峰までスギ人工林で覆われた急峻な山間に長閑な山村風景が広がる。その道路脇に丸太が無造作に積まれた場所が、西條孝一さんの自宅を兼ねた製材工場、工房「横屋」である。その入り口には長年風雪に耐えたと思われる「銘木工房よごや」と記された看板が目に入った。木材を削る軽やかな音が響き渡る。その音源は工場の一歩奥であった。一人の男性が機械作業に取り組んでいた。職人らしい風貌に人生の深みが漂う。孝一さんであった。声を掛けると、ぶっきらぼうにも聞こえるが、寛容な声であった。事務室に案内され、間髪を入れずに孝一さんから熱心な語りが始まった。

地元の木を活かしたい

開口一番に「もう相当前になるが、森の名手・名人に認定されたよ。」という。孝一さんは、津山木工芸品事業協同組合発足時から組合に加入、木工を通して地域産業に貢献、その技能と功績が認められて、公益社団法人国土緑化推進機構が主宰する「森の名手・名人」に 2002 年度（平成 19 年度）に認定されている。中学卒業後、地元の製材所に勤務。働きながら木工を独学で学び始め、全国の木工先進地へ足繁く行って学んだ。「ここ津山は山に恵まれスギの木が豊かにあったからね。地域の木材を是非活かしたいとの思いから、また唯一の趣味でもあるモノづくりを活かそうと木工の道を歩むことにしたんだ。」津山の木工職人は皆独学で学んだ職人ばかりだそうである。こんなにあるスギ材は工芸



工場・工房の背後にもスギ山が迫る



木について熱く語ってくれた孝一さん

品に向かない材だという。柔らかすぎてモサモサになるので、当時は誰も（スギ材を木工品に）使おうとしなかったが、ほかの材にはない温もりがあって、断熱効果があるという。そんなスギの長所・短所を活かして、津山のスギが脚光を浴びたのは、矢羽細工であった。孝一さんら組合の木工職人の努力によって、多くの手間と技術から生まれたもので、スギ材を丹念に継ぎ合わせた矢羽は、反りや狂いがなく、木の肌触りの良さ、使いこむほど深みのある美しい風合いが現れる逸品である。

孝一さんは、木材の伐採から製材、そして加工という一連の工程を全て自分で行うそうである。曲がった材はそれなりに使うし、無駄を出さない、材の特長を活かして作品を作り上げていくことにやり甲斐があるそうだ。木工は趣味であり製作は楽しみそのもの。そして、自身の作品を買ってくれたお客さんが喜んでくれることが何よりも嬉しいことだそうである。「木材は生き物だよ。」と言い切る。木材は様々な事を物語ってくれるし、年輪を見るとその年の気候や台風の進行方向などがわかるそうだ。年輪の隙間に粉塵が混ざっていることがある。それによって、木が育っていた近辺で採石が始まった時期がわかるというの



山裾から尾根筋までにスギが植林されている津山地域の山並み



孝一さんの矢羽細工作品（お皿）



同上（茶びつ）

だ。年輪幅が広がったり、雨が当たる側には樹脂が溜まる。特にスギ材はそうした環境の変化などを敏感に表してくれるという。ここ津山周辺は、霧が発生しやすい地域で礫を多く含む山なので、水捌けも良くてスギの成長が頗る良いところであるという。木の良さとは？との問いに「なんといっても温もりだね。」という。「化学製品や陶器類などほかの素材には持ち得ない特色だね。そして、その土地の気候風土で育った木材を使えば長持ちするんだ。居久根がそうだよ。昔は次の代の家づくりに居久根から木材が供されるのが習わしであったんだ。傷が付いても削ればまた生き返るし、再利用できるしね。」その

説明に勢いと力強さが加わった。

孝一さんにも辛い思い出がある。会社勤めの安い給料で苦しかった中で、木工の道に進んで果たしてどういうものを作って皆が喜んでもらえるのか、悩みに悩んだことであるという。悩んだ末に作り上げたオリジナル作品に客が集まってくれること、自分の作品でもないのに古い木製品の修繕を頼まれること、自分（の技術）を信頼してくれて、遠くは九州から修繕依頼があるという。口伝で孝一さんの技の凄さが広がっているようである。



孝一さんが手掛けたエンジュの床柱の修繕

木の持つ自然色、自然の造形に拘る

孝一さんは木材の材色に豊かさを感じるという。様々な変色にも趣を覚えるという。薪ストーブの煙突の継ぎ目の隙間からタール分が漏れ出して、置いてあった木に染み入りなんとも言いようのない色が出ていることに気づいたそうである。広葉樹は樹種によっても色合いは様々で、しかも様々な色に変化していくという。その作品を見せて頂いた。クワノキの花器は、作りたての時は黄色だそうだが、時の経過によってチョコレート（茶）色に変色。カヤノキの壺は目にも鮮やかな黄～朱色のグラデーション。また、誰も見向きしないような、手を掛けたくないような木を使った木工も得意としている。例えば落雷で焼け焦げたクワノキを加工したという花器。工芸的価値のありそうな代物である。孝一さんは多彩な技を身につけている。独学で学んできた木工の技は、誰も教えてはくれない、「見て覚えろ精神」でいろいろな職人の所に出向いて彼らの技を見抜いて、それをヒントにして技を磨いてきたという。「木には背と腹と脇があって挽き方が違うんだ。曲がった木でも挽き方によって真っ直ぐな木として使えるんだ。」そんな孝一さんの卓越した技を頼って多くの人が視察に来るという。



左：落雷を受けたクワノキの花器
右：チョコレート色に変色したクワノキの壺



鮮やかな色合いのカヤノキの壺

次代へ伝えたい木工の技

孝一さんがしみじみと語ってくれたのが、担い手の問題であった。自身も老いてきたので、自らモノを作るよりもこれからは技を伝えていけるような職人を育てたいという。「モノづくりにもっと興味を持ってもらいたいねえ。今の人たちは木の扱いがわからないし、木は全て木にしか見えないんだよね。」地元の小学校や中学校に出向いて木工や木の良さ、

そして地元津山の良さなどを伝えて、地元で木工に携わってもらえるように頑張っている。気持ちは山々だが、どうしても不便な地元に残る者がいないそうだ。木工は木屑が沢山出て埃も舞うし汚いイメージがあり、敬遠されがちであるが、小さい頃に興味を持ってくれば、後継も期待できるという。また、東北工業大学の学生がインターンシップで学びに来るし、地域おこし隊として何人か受け入れている。木工は短期間でその技術は習得できないし、働きながら木工を学んでももらえる環境、それを支援する制度が充実すればいいという。

孝一さんの熱き語りを一通り伺ったところで、看板の話を投稿かけた。工房「横屋」を「よごや」を読ませている理由は、屋号だからだそうである。孝一さんの何代目か前までは旅館を営んでいた。「当時は、街道の要所で製糸工場なども建ち並び賑わっていたがね。時代の流れでそんな面影はなくなってしまったよ。」ちょっぴり郷愁に浸り寂しげな表情で語ってくれた。津山のまちの盛衰の情景が走馬灯のように孝一さんの心を過ったのだろうか。

多忙な日々にもさらなる高見を…

最後に、孝一さんが現在製作中であるという作品を見せて頂いた。登米市のふるさと納税返礼品として量産体制中の津山産ヒノキ材ぐい呑み。「飲み口を少し外に反り出しているのが特徴だよ。この部分の加工が難しいんだね。」また、NHK朝ドラで放映された「おかえりモネ」では、登米市が舞台となって林業がクローズアップされた。その反響が



使い込まれた旋盤に向かう孝一さん



ぐい呑みを持つ孝一さん

凄く、注文が殺到しているという。特に木製箸入れ、そして大きな八角形の矢羽茶びつ。周りから「なんであんたのところだけ忙しいの?」と言われるほど本当にてんてこ舞いのようなのである。コロナ禍での巣ごもり需要も影響し、ネットによる注文が多いそうだ。現物を見ずに買い求めていただくことになることから、顧客からクレームが来ないように製造した品物は入念なチェックを繰り返した上で出荷しているとのこと。御礼の手紙は沢山来るし、「とっても使いやすい。」といった評価も頂いているという。そして、その技と巧みが一目置かれて、拘りのあるオリジナルの品物注文も舞い込むという。先日は、とある高級レストラン（麺類も提供するという）から井と八角形の箸と箸置きが注文が入った。井は津山産のアカマツ材で製造。傷が付きにくい材だそうである。箸・箸置きはケヤキの埋もれ木製である。これで麺をすすったらどんなに美味しいことだろうか。

孝一さんは、設立当初から組合員として活動している津山木工芸品事業協同組合の理事長が病に倒れたため、組合を実質切り盛りしている。本当に信望のある職人として、東奔西走している多忙な方であった。孝一さんは、道の駅津山もくもくランドの駅長でもある。集客力を高めるため、木への関心をもっと多くの人に深めてもらうため、東北工業大学の学生らとツリーハウスを道の駅構内に造る計画を持っているそうである。ものづくりへの謂わば挑戦として、是非実現させたいという。その精力的、果敢な行動力に頭が下がる。無骨な語り口ながらも、言葉の先々には強さだけでなく優しさと思いがやりがしみ出ている。木に対する愛情めいた拘りも然り。長きにわたる木工職人の熱き思いの余韻を残して工房を後にした。



注文殺到の箸と箸入れ



おしゃれな形が人気だという矢羽茶びつ



アカマツ材の井とケヤキ埋もれ木の箸



やま あい ふう けい てん びょう

山間の風景点描



主役は如何に



新緑の季節は、落葉樹と針葉樹がお互いに主張し合う。
スギの存在感が大きいですが、スギを覆い隠すように大きく
枝を広げて新葉を撓わにつけた広葉樹も目いっぱいに
視角に入ってくる。ここはやはり両者互角である。

4. 木に魂を吹き込む

一刀彫り職人 石橋 康宏さん



県道白石蔵王線を上っていくと、温泉街の手前に窯と一刀彫りの看板が目に入る。その看板を目印に左折し奥へ進んでいくと、木立に囲まれ開けた土地に工房が点在していた。その一角に「ざおう彫刻工房」があった。建設されたばかりの工房である。板材に彫られた看板がでんと構えていた。色褪せた藍染めの暖簾に記された「彫」と「彩」の文字も印象的だ。「営業中」のお札を確認して店内に入ると、木の香りに一気に包まれた。クスノキの清涼感溢れる香りである。店内に飾られた極彩色の作品に釘付けになる。今時風のプリントTシャツにジーンズ姿の石橋康宏さんが出迎えてくれた。関西弁の挨拶が畏まらずにほっこりする。



小洒落た工房

紆余曲折を経て…

康宏さんは、Iターンで蔵王の地に工房を構えた経歴の持ち主である。生まれも育ちも奈良県。大学卒業後、平成17～22年まで自動車販売店に勤務。自宅で偶然目にしたTV番組で仏師（仏像彫り職人）養成の学校（京都にある伝統工芸の専門学校）の様子にビビッときたそうである。直ぐさまその学校に赴いて在校生から話を聞き、ますます仏師への興味が沸き起こり、一念発起して会社を辞めて入学。即戦力ある技術を学べるものの、卒業して直ぐに就職できるわけではなく挫折して辞めていく学生も少なくない。この道は辛いことが多いことも重々わかっていた。思えば、小さい頃から絵を描くことや図工が好きだったそうだ。当時、高



お気に入りのハシビロコウを手にする康宏さん

校進路指導の先生から身延山にある仏師の大学を勧められたそう
うだ。既に仏師へのお導きがあったのである。学校卒業後、著
名な某仏師に弟子入りし、仏師が大変少ない状況にあること、
故郷の奈良に貢献したい気持ちで道を歩んだが、自分の考えと
合わず辞した。奈良にある伝統工芸館にぶらっと入ると、そこ
の館長から伝統工芸の養成募集の話を受け直ぐに応募、見事
採用された。その館長の出会いが奈良一刀彫り（独特の鋭いノ
ミ跡が見せる稜角と面、そして金箔や水干・岩絵の具で彩られ
た微細で華麗な図柄との見事な調和の美しさが特徴。題材には
干支、能人形、雛人形や五月人形など広範囲）への道を歩ま
せるきっかけとなった。実は、仏師は自我を出してはいけないこと、
一定のルールが決められていること、それに従わなければならない
ことが窮屈だったそうだ。自由に彫りたい、人間的に尊敬でき
る彫り師になろうと思った。康宏さんが高校生の時に彫ったとい
うサツマイモの彫像を見せていただいた。正に一刀彫りの原点で
ある。少々恥ずかしかったのか康宏さんの顔が赤らんだ。専門
学校時代の卒業作品も拝見。緻密で微細な彫り物に思わずびっ
くり。しかし、これは先生の手を借りての作品だそうで、あまり
自慢されていなかった。



高校時代の作品



大学の卒業作品

「蔵王」の一刀彫りを広めていく



煌びやかな奈良一刀彫り

専門学校で出会った今の奥様（彼女は陶芸を学んでいた）の母の実家が蔵王町で、父がその実家で窯元を開いていた。奥様は父の家業である陶芸を継ぐため、そして自身も奥様との結婚を機に一緒に現在の場所へ移住した。奈良の伝統工芸を通してふるさとに貢献する当初の意思もあり、後ろ髪を引かれる思いでふるさと奈良を後にしたが、こちらに移ってから、奈良一刀彫りの伝統を守るだけでなく、多くの人に自らが住み着いた蔵王ならではの一刀彫りを

知ってもらうこと、オリジナルの一刀彫りを広めて残していくことに気持ちを切り替えて現在に至っているそうである。2016年(平成28年)に工房を開き、今ではオーダーで製作を依頼されることが多くなっている。贈り物にしたいとか、その人それぞれの思いを聞いてから、形にする。御礼の手紙をもらうこと、喜んでいただけることが何よりも嬉しいという。

一刀彫りの材料は、クスノキが専らでその他にはカツラ、ヒノキ、サクラなどが用いられる。宮城県のケヤキを使ったことがあるが、やはり堅くて加工しにくいそうである。彫っている過程で木屑がいっぱい出るため、それを棄てることなく、脱臭剤などに再利用しているという。クスノキは東北に自生していないことから、仙台の木材業者を通して関東から丸太で調達、製材業者に板材に挽いてもらい、それを自宅で5年ほど自然乾燥させて使っている。その一刀彫りの妙技を見せて頂いた。出迎えのときの出で立ちから作務衣姿になり、気合いを入れて作業場に座り込むや否や、片足でしっかりと彫像を抑え木槌で鑿を打ち込むその姿には、近寄りがたい厳しい職人氣質が漲っていた。一刀彫りの工程は、バンドソーで粗方の形を作り、次に鑿で荒削り、次に別な鑿で形を整えて彩色していく。

少しでも一刀彫りを知ってもらうため、ネット販売やHP、YouTubeの活用のほかに康宏さんはワークショップや体験教室を開いて、小学生向けに削り体験などをさせているという。小さなことであるが、その積み重ねを継続していきたいそうだ。また、同業者である笹野一刀彫り職人と交流している。笹野にはオタカポッポといったシンボル作品があるが、蔵王の一刀彫りにもそうした作品を広めていきたいそうだ。その一環として、現在製作中の「蔵王大権現」(その由来等は後述)の彫像がきっかけとなれば良いという。



無心の境地で鑿を打つ



様々な鑿と木槌



木の塊が削られて虎へと形作られていく

木を生かす、木目を表す妙技

康宏さんは、木材の良さについて「シンプルに温もりです。」と答えた。そして、彫り物によって樹種を変えて色合いや木目を使い分けるといふ。この木目の美しさを巧く表すには彫り方や刃の研ぎ具合で違いが生じるそうだ。「時には割れたりする。木目の違いが面白いです。単なる木ではなく、形にすることによって木が生きる。魂が入り込む。それが木の良さです。」と言い加えた。「作品は、ずっとその家に飾られて残るものなので、そうした作品を注文していただけることが嬉しい。一方で、仕事（注文）がない時は辛い。自らどんどん作っていくような仕事ではない。」という。



愛嬌ある干支の一刀彫り



五段飾りの豪華な雛人形の一刀彫り

思わぬ出来事

康宏さんが最近知ったという不思議な縁を話された。ふると奈良の吉野山のシンボルで修験道の総本山・金峯山寺があるが、そこに祀られている「金剛蔵王大権現」という彫像がある。それが蔵王町と結ばれているという。奈良時代から平安時代の初頭、深山幽谷で荒行を積むことによって力を培う修験道が興り、各地の山々に修験者が入り込んで道場（入山修行する山）を開いた。修験の開祖である役行者の叔父・願行（自身も徳の高い修験者）が、蔵王山を道場とすることを決意し、山頂に吉野金峯山寺蔵王堂の祭神である蔵王権現を分祀したそうである。現在、地元の刈田嶺神社に納めることになっている「蔵王権現」像を彫っている最中とのこと。製作中の「蔵王権現」は片足立ちの彫像で、台座と一緒に彫る作業が困難を極めるそうである。また、コロナ禍で来訪がなくなってしまったが、過去に外国人観光客が来訪し、「ハシビロコウ」の作品に目を留め、



製作中の蔵王権現像

「是非売っていただけないか」と懇願されたそうである。これは眼に琥珀を使うなど拘りを持って作ったもので非売品であったが、あまりにも懇願されるので、売ることになった。脚が細い作品で航空便では折れることを懸念したが、果たして折れていた。しかし、彼女はそれを全く気にせず大事にすると言ってくれたことが、康宏さんには嬉しかったようだ。後日談であるが、彼女は著名なハリウッドのデザイナーであった。店に来る客人は作品をじっくり眺めてその作品と対話するそうである。その作品から声を掛けられて買い求めるという。彼女もその魔力に惹かれたのであった。



外国人デザイナーの心を
射止めたハシビロコウ

そして、未来に思うこと

まだまだ未熟な自分であり、言える立場にはないと前置きして、康宏さんが語ってくれたこと。「これからの人たちには日本人しか出来ないもの（伝統文化）を自分の目で見て、どうしたらいいのか自分の頭で考えてもらいたい。伝統を継いで欲しいというのは難しい。まずは見てもらうこと、何かを感じてもらいたい。昨今の日本の文化の象徴としてアニメなどがあるが、産業や技術が発展しモノが溢れる時代とは違った機械も何も無い時代に、日本人がよくぞ作ったモノ、古いモノを是非見てもらいたい。そしてそれを使って身近に置いてもらう。我々もそういう機会、作品を作っていかなければならない。努力していかなければならない。」という。原材料として普段から木を使っているが、森林や林業の危機、抱えている問題を余り意識せずに無心に彫っているというが、「社会問題としてマスコミでも頻繁に取り上げられている頻発する自然災害は気になります。資源の循環利用は大切です。」と、一瞬険しい顔になった。

40歳手前の職人ながら、紆余曲折の人生と経験談に驚愕。見知らぬ土地で様々な労苦はあったかと思うが、微塵とも見せぬ元気で明るい誠実な人柄、一刀彫りへの並々ならぬ思いに、今後の活躍が楽しみである。最後までお見送りいただき感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、クスノキの灰かな香りをまとめて工房を後にした。



コロナ禍で製作を始めたアマビエの一刀彫り



やま あい ふう けい てん びょう

山間の風景点描



夏を彩り香る山百合



入道雲に蟬時雨。小川のせせらぎに涼を求めて山裾に向かうと、あの強烈な芳香が漂う。見事なヤマユリの群生。人々は山裾の草を刈るが、ユリは残す。大輪と香りが主張し、彩りを添えている。里山の夏である。

5. 地元の木に拘る

木造建築家 佐々木 文彦さん



国道 398 号を北上川沿いに走行、眼前に穏やかな追波湾が開けていく。そして海沿いに連なるいくつかのトンネルを抜けて直ぐ左に山小屋風の建物がある。これが佐々木文彦さんの設計事務所である。32 年前に建てた自宅兼事務所は東日本大震災で消失、コンクリート基礎部分だけが残った。津波はトンネルの高さを優に超えるものであったという。その基礎の上に元の自宅の大きさに合わせて事務所を再建した。被災地の復興の拠点にしたいという強い思いから、現地再建を決めたそうだ。



現地再建された設計事務所社屋

木々に囲まれた創造空間

被災の爪痕を残す基礎部分を上がって玄関に踏み入ると、そこはスギ材がふんだんに使われている木空間であり、木の香りと温もりに満たされた別世界であった。そして、和紙で作られた奇抜な人形と木製の英文字 MEGE が出迎えてくれた。MEGE というのは「^め 家」、「佐々木家」の屋号だそうである。トレードマークのハンチング帽姿の文彦さんに招き入れて頂いた打合せコーナーには、吹き抜けとそこに聳える薪ストーブのある開放的な空間が広がっていた。建築関係の蔵書と文彦さんの手掛けた作品のパネルなどが飾られ、重厚感に溢れた重なり合う無垢材のスギの梁、ロフトの天井を覆う厚さ 30mm というスギ羽



作品パネルを背にした文彦さん

目板に目を奪われた。ここは夏涼しく冬暖かいという。この日、外は真夏の太陽にジリジリ照らされていたが、確かに打合せコーナーは涼しい。窓越しに遠く小指の浜が見通せる。震災前は集落で遮られていたという。



テーマは「未完成の家」という事務所社屋の内部、スギ材や珪藻土など自然素材がふんだんに使われている

地産地消の家づくり

文彦さんは、旧北上町十三浜小指地区で半農半漁の家に長男として生まれた。小学校の頃から漫画を描くことが大好きで、当時は漫画雑誌に投稿したりかの有名な漫画家にまで原画を送ったりしたという。自身の絵を描く才能を生かしたいとの思いを汲んだ高校時代の担任の先生から、建築士の道があることを教えてくれた。その時に差し出されたアメリカの建築家で近代建築の三大巨匠とも言われたフランク・ロイド・ライトの作品集に後押しされ、以来憧れの的となった。そして、高校卒業後、建築家を目指して親の反対を押し切って上京。当時、地下鉄工事などで仕事をして学費を稼ぎながら、夜学の専門学校で建築を学んだ。親の勘当まではいかなかったが、絶対に挫折してはなるまいと頑張ったそうである。学校卒業後、東京の設計事務所に勤務。そこで経験を積み、仙台に移って28歳で独立。10年ほどは設計だけでは生活が送れず、工務店の下請けに入ってどうにか食い継いだという。この



幼い頃に描いた漫画などは津波で全てを失ったが、自宅周辺で唯一見つけ出したものがあるという。それは30代の頃に「青年の翼」で訪問したスペインの街で、持ち歩いた御朱印帳にスケッチした絵であった。風情ある町並み、フラメンコを踊る女性の姿などが見事に描かれていた。

間に様々な現場を回って知り得た関係業者との縁が、現在の「杜の家づくりネットワーク」(宮城県の風土や歴史に調和し、心身共に健康に生活することが出来る住まいを考え、学び、実践しようという目的で、1999年に設立。林家や製材業者、大工、メーカー、建築家など業種を越えて結成、県産材をはじめとする自然素材を使い、木材、森林、環境への理解を深め、優れた木造技術と伝統を重ん



文彦さん設計の「地産地消の家」

じる。)の礎となっている。文彦さんの仕事のコンセプトでもある「地元の木で地元の職人で家を造って地元で経済を回して地元にお金を落とす、一緒に汗を流して家を造る」「地産地消の精神」が形づくられることとなった。

施主にもこの理念を共有してもらい、一緒に造り上げていく。例えば大黒柱に使う木を山で自ら選定してもらったり、工事現場や材料検査に立ち会って頂き、家に使用される木材を確認してもらい、その際には木材の特性などをしっかりと伝え、仮に予算が足りない場合は、例えば壁塗り左官工事に施主自らが労働提供して、一緒に作業を行ってもらおうといったことをしている。このような家はずっと住み続けてくれて、手元から離したくないそうである。



そして、文彦さんにはもう一つの強みがある。それは、ドラフター(製図台)を使った手書きによる製図である。設計図面作成にCAD(PCを使用して作図できるシステム)を使わない、というよりも使えなかったそうである。手書きは設計者の思いが伝わり、感情が移入でき、何よりも打合せ中に手直しが直ぐ出来るという。これも漫画を描いてきたお陰だそう

だ。ここで、その設計作業を行う核心部の仕事場を拝見させていただいた。窓越しに見える裏山のそこに咲き乱れる野生のアジサイの花が印象的である。一際長く出された庇は、雨水を家の周囲に巡らす自然の側溝へ流し込むためだそう。自慢のドラフターに向き合い、軽やかに定規を操りながら、図面を引く文彦さんの姿が、勿論であるが実に格好良かった。都会の



ドラフターに向き合う文彦さん

雑踏から離れたここには、ゆったりとした時間が流れる。そして、季節が織りなす美しい自然に囲まれ、文彦さんの豊かな想像力を沸き立たせる羨望の空間であった。

古民家再生、生まれ変わる

設計の傍らで、文彦さんは古民家再生の活動とその普及にも力を注いでいる。東京で勤務していたアトリエ系の設計事務所で、飲食店の店舗を古民家調にアレンジする設計に携わった時、古民家がその使われ方次第で全く違う建築物に生まれ変わることに、そして木材の魅力に取り憑かれてしまったそうである。古民家の有効活用を持ち主に提案して、壊されて産業廃棄物になってしまう古民家でも、耐久性があって耐震補強できることや冬場も暖かく過ごせるように出来ることなどを伝え、処分を思い止めてもらうという。最近の事案では、伊豆沼湖畔にある古民家（築120年でケヤキの無垢材が梁や大黒柱など随所に使われている）を解体して造られた診療所の完成見学会に、古民家の家主との連絡が取れず招くことができなかったが、たまたまこの工事で出入りしていた業者が家主の息子さんであることが判明。親族一同を集めて見学会に来ていただいた。そこで眼にした大きな梁を見て、実家のものであることに気づき、まさか実家がこうして診療所として再利用されたことに感激し、大変喜んでくれたそうである。文彦さんにとって生涯忘れ得ぬ出来事であった。



文彦さんが手掛けた古民家再生の診療所



同上（小屋組みの木材が圧巻）

県産スギ材の利用で山に還元したい

文彦さんは県産スギ材に拘る。一番植林されているのがスギであり、文彦さんの親が残してくれた山もスギ人工林である。自身森林組合の組合員でもある。外国から輸入しなくてもいいほどにスギが沢山あるのに、伐っても採算が合わない。伐り出せない現実、理不尽な状況を憂える。「ただ山を持っている所有者が殆どである。かつては自宅の修繕に自分の山の木を伐っ

て使っていた。今回のウッドショックが県産材利用の起爆剤になれば良いが…」という。スギ材を床や柱、天井などに使っているが問題ない。調湿効果が大きい。赤身のスギ（心材）はデッキなど外構にも使う。庇を大きく出して風雨に晒されないように工夫すれば問題ないという。経済効率第一で外材を使うことに疑問を持つ。また、スギ材の復元力に気づかされたという。床に厚物のスギ板を使うが、モノを落とすと凹んでも、そこをアイロンがけのように熱を加えると元に戻るという。スギ材に囲まれた部屋で寝ると、個人的な感想であるがぐっすり眠れるという。鎮静効果もあるようだ。ただ欠点は傷つきやすいことであるが、傷などは鉋がけすれば綺麗になる。扱いやすさもスギ材の長所である。



北上の海・金比羅崎とスギ木立

木造建築は手間が掛かるという。今一番の課題は、手刻みできる大工がいないことであるようだ。

日本の良き伝統工法による木造建築を残していくためにも、現場を知る大工、意欲ある大工を育成していく必要があるという。今流行の住宅はシンプルモダンでキュービックな家であるようだ。こうした家は工場で全て部材を造り、現場で足場を組んで組み立てるだけの工法で大工が不要であるという。「伝統工法の現場が少なくなっているが、時代の流れであるとは言いたくない。流れさせたくない。木の家をいつまでも残していきたい。そのためにも大工や建具、左官といったあらゆる職人を育てていきたい。」温和な文彦さんが言葉を強め、険しい表情になった。

文彦さんには、これからの夢があるという。住宅だけでなく1,000㎡以上の大きな建物、公共建築物、幼稚園や保育所などを手掛けたいという。それも県産材を存分に使用して、熱効率の良い地球環境に優しい建物にする。特にスギ材を使って山を持っている人にも還元できるようにしたい。正に地産地消による



文彦さんが設計した東北大学大学院環境科学研究科エコラボ、川渡農場の山から伐り出したスギ材を使った延べ床面積1,000㎡の木造建築物

循環型社会への貢献を強調された。復興への道のりは並々ならぬ労苦があったと思うが、そんなことを微塵と見せずに前向きに直走る文彦さんの姿に、スギ材のような温もりと思いやりを熱く感じながら、事務所を後にした。



やま あい ふう けい てん びょう

山間の風景点描



聳え立つ楠



ここはリアス海岸。里山と里海が織りなす絶景が連なる。断崖に聳え立つ一本の大きな木。タブノキである。大木は海に影をつくり魚つき林に、通直な幹は丸木舟に、樹皮は線香に…大いに役立つ。そして^{たま}霊が宿る木でもある。

掲載内容に関する留意事項



- ・掲載内容については、本人の了解を得ているほか、事前の校閲をいただいています。
- ・一部の画像については、本人からご提供頂いたものを掲載しているほか、本人の了解を得て本人が管理するHPなどより転載しています。

大 銀 杏



この日の朝は、久しぶりに前夜から雪が降り続き、一面に銀世界が広がった。そこに葉を落とした寒々しくも逞しいイチョウの大木が立つ。朝日を浴びて仄かな朱色に輝く。枝をいっぱいに広げた寛大な姿に、「よしっ! 今日頑張るぞ!」元氣と氣合いをたくさんいただいた。

取材を終えて ～つながりの大切さ～

日本で最初の新型コロナウイルスの感染が確認されてから、丸2年が経とうとしています。発生しただけでも驚きだったあの日、感染拡大は諸外国のことだと思ったのは疾うに昔の話となり、日々1万人超え、2万人超えの感染者数でも動じない日が来るとは思ってもみませんでした。あんなに鬱陶しかったマスクの着用、消毒の励行やソーシャルディスタンスの確保、三密対策といった新たな生活様式が、普段の当たり前の生活様式へと様変わり。かえってマスクを着用しないと落ち着かないほどです。

そのような中、木に関わりのある職人肌の方々とお会いする機会を再び得ることができました。今回の取材で特に印象に残ったことは、皆さんが異口同音に「つながり」という言葉を発せられたことです。多くの人との「つながり」によって仕事生まれ、人との「つながり」が自身を育ててくれる、その「つながり」をとっても大切にされていることです。冊子のテーマにも絆「木づな」、「つながり」を掲げています。その仲介役が「木」であり、そして「木」の最たる良さ「温もり」を大切にされていました。コロナ禍で人と人が分断されているご時世、マスク越しながらも対面して話すことの有り難さ、人の「温もり」が伝わり、あらためて「つながり」の大切さを知った取材となりました。ご多忙の中、そして何度も取材に快く応じていただきました職人の皆様に深甚なる感謝を申し上げます。

なお、この「木育」に関する取組は、宮城県の「みんなで広げる「木育」活動推進事業」を活用いたしました。

宮城県林業振興協会事務局



ヤブツバキと狛犬



とある神社に祀られた狛犬像に、誰かがヤブツバキの花を飾り付けていました。その背後にはヤブツバキの花が満開。ヤブツバキの花言葉は「気取らない優美さ」。凜とした美しさと強さが備わっています。狛犬は邪気を祓う意味があるといわれています。狛犬にそんな花を添えてコロナの終息を願ったのでしょうか。

編集・発行：**宮城県林業振興協会**
(公益社団法人 宮城県緑化推進委員会内)

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17
宮城県仙台合同庁舎10階

TEL 022-301-7501 FAX 022-301-7502
E-mail : miyagi@ringyou-fukyu.net

